

報告

## 第2回日本宗教研究・南山セミナー

小林奈央子

KOBAYASHI Naoko

2015年5月30日・31日、南山宗教文化研究所にて「第2回日本宗教研究・南山セミナー」が開催された。2013年6月の第1回開催に続くものであり、今回も海外の大学院で日本宗教を研究する、日本語を母語としない若手研究者が日本語で研究発表をおこなった。発表者5名とコメンテーター5名のほか研究所内外からの参加者を含む計36名が参加した。筆者は、第1回開催を会場で拝聴したが、今回はコメンテーターの1人として参加させていただいた。前回、各発表者の研究レベルの高さに感服したが、今回もその時の感動をふたたび思い起こすような優れた研究が並んだ。

今回選抜された5名の研究者と発表タイトルは以下のものであった。

Eric Swanson (Harvard University).

「五大院安然における調伏の概念について：降魔三摩地の再評価に向けて」

Luke Thompson (Columbia University).

「釈迦を日本へ：日本における『悲華経』の受容と神話の中世的再加工」

Paride Stortini (University of Chicago).

「築地本願寺の東と西」

Justin Stein (University of Toronto).

「臼井靈気療法とレイキ：20世紀日本に於けるスピリチュアル・ヒーリングについて言説空間」

Kyle Peters (University of Chicago).

「自己自身の形成」

今回も多様な視点からユニークな研究発表がなされ、これらの発表に対し、コメンテーターの阿部泰郎氏（名古屋大学）、吉田一彦氏（名古屋市立大学）、吉永進一氏（舞鶴工業高等専門学校）、大谷栄一氏（佛教大学）、そして筆者の5名がコメントをした。

初日のトップバッターとして、最初に発表をおこなったスワンソン氏は、中世日本仏教研究における代表的な枠組みである、「本覚思想論」と「顕密体制論」の両論において重要視される五大院安然が、「密教」の役割をどのように理解していたかを考察した。氏は、安然が、密教の役割を、「魔」や「障」を「調伏する」明王を中心とする修法、「降魔三摩地」にあると理解し、それが安然以降、「密教」の概念の構築に大きな影響を与えたのではないかと結論づけた。この発表に対し、阿部氏から、安然の「調伏」を思想化させ、日本思想史の中に位置づけようとした点で、安然研究の新しい側面を開くものであるとのコメントがなされた。

次のトンプソン氏は、12世紀初頭から、末法の世に釈迦が大明神として示現するという主張の典拠となった『悲華経』を取り上げ、実際には「大明神」という言葉を含

まないこの経典が、典拠とされた理由と、中世において『悲華経』に関心をもつ僧侶が増えてきたことについて論じた。氏は、『悲華経』に示される釈迦が、それまでの釈迦の性格とは異なり、「救済する仏」として現れているところに、中世神話的な思考が見られるということ、そして、仏教の起源に回帰したいと考えていた貞慶をはじめとする戒律復興を目指した中世の僧侶たちが、『悲華経』を積極的に用いたことを指摘した。この発表に対し、吉田氏から、末法思想との関係、とりわけ、法然らが唱えた末法濁世を救済する仏は阿弥陀如来であるという教えに対抗し、釈迦の救済を強調した側面もあるのではないかとのコメントがなされた。

2日目はストルティーニ氏から発表が始まった。氏は、東京の築地本願寺の歴史と今日の活動に注目し、同寺が日本とアジアの結びつきの代表的な例であるとともに、日本とアメリカの仏教徒の交流の中核的役

割を果たしていることを論じた。氏は、同寺の近代化の歴史を「異文化間ミメシス」および「トランスロカティブな歴史叙述」の視点から考察し、同寺は西洋、日本、インドの近代的な交流の結果として存在しているとした。この発表に対し、大谷氏から、近代仏教研究ではモダニズムの側面と伝統的な側面の2つを共に見ることが重要とされ、伝統的な側面として、例えば、同寺において葬式はどのようにおこなわれているかなども調査する必要があるとのアドヴァイスがなされた。

次のスタイン氏は、1920年代東京で誕生した「臼井霊気療法」と、1990年代に「レイキ」として広く知られるようになった両者の実践者による、霊気療法と宗教の差別化を試みる記述について比較をおこなった。氏によれば、20世紀初めの実践者は、臼井霊気療法が宗教的な権威を借りながら、一方では宗教から距離を置こうと悪戦苦闘し、20世紀後半から現代に至るレイキの実践者



たちもまた、レイキは靈的活動をしながらも宗教ではないとする「第三空間」の立場を主張しているという。この発表に対し、吉永氏から、両時代がともに「第三空間」の立場にあるといっても、20世紀初期の靈氣療法のポジションと、1980年代以降のレイキのポジションには、天皇制の有無という決定的な違いがあり、そうした政治的な変化もおさえた上での分析が必要になるとのコメントがあった。

最後のピーターズ氏は、「個人作者」と「作者の死」の言説に代わるものとして、西田幾多郎の哲学を通じて芸術創作のオルタナティブな理論を提示し、芸術作品とその創作過程における主体の多元的様相について論じた。氏によれば、芸術作品自体が自己限定を創造的に再構築・再形成・再編成するため、歴史的世界による限定の中にあるながらも、作品の創造を通して自己自身が新たに創出されるという。この発表に対し、元研究所所長であるJ.W.ハイジック氏より、問題提起としては面白いが、概して西田の言葉は抽象的であり、西田自身がイメージを与える表現や、例えをほとんど用いなかったため、西田の理論によって芸術作品を分析するのは難しさがあるのではないかとのコメントがなされた。

以上のように、5名の発表者の研究テーマがいかにも多岐にわたるものであり、独自の視点をもつものであったかがお解かりいただけるであろう。セミナーの折にも話したが、筆者自身が1999年～2000年の1年間、ロンドン大学SOASの大学院において日本宗教を学んでいたころの、日本語を母語としない学生の研究テーマと比べると、隔世の感を禁じえない。当時の筆者の同級生の多くは、日本宗教といえば、禅という紋切り型のイメージを抱いており、日本宗教に

関する幅広い知識はあまり有していなかった。今回のセミナーの2日間は、この15年ほどの間に日本宗教研究が、国際的なレベルで飛躍的に深化し、多角的に発展していることを実感する機会ともなった。

そして、そうした発展は、海外の日本宗教研究者の尽力によることはもちろんであるが、同時に、日本人研究者の中にも、積極的に海外に向けて自身の研究を発信し、海外の研究者と活発な学術交流をおこなう学者が、近年増えてきた結果であると思われる。折しも、今回のセミナーには、筆者の2人の恩師が参加していた。1人が同じコメンテーターとして座に連らせていただいた阿部泰郎氏であり、もう1人がたまたま来日中で、フロアで聴講されていたロンドン大学SOAS日本宗教研究センター長のルシア・ドルチェ氏である。両氏こそ、日本の宗教研究において、日本人研究者と海外研究者の活発な学術交流を象徴する人物であり、筆者は両氏が研究の現場で議論し合い、研究上の連携を深めていく過程を身近に見てきた。また、阿部氏は近年精力的に海外で研究発表や院生を引き連れてのワークショップをおこない、国際的な研究者の連携、交流の輪を広げている。こうした取り組みが、海外における日本宗教研究に刺激を与え、さらなる研究の発展に貢献していることは間違いない。最後の全体ディスカッションで、所長の奥山倫明氏からも、海外の研究者と日本人研究者との学術交流の重要性が強調され、南山宗教文化研究所がそうした拠点となることが、昨年開催された研究所創立40周年記念シンポジウムでも要望され、研究所としてもそれに応えていく心組みがあるとの話があった。そして、2回目を迎えた本セミナーも、そうした意識に基づく取り組みの1つであり、今後は、

日本人研究者が英語で研究発表をおこなえるような機会も設けたいとの考えも示された。

今回のセミナー終了後しばらくして、所長の奥山氏から研究所で開催される宗教研究の国際ワークショップでの研究発表の打診を受けた。セミナーへの参加を通して、国際的な学術交流の重要性を再認識し、また参加者と共有した筆者自身が、それを絵

空事で終わらせてはいけないとの思いがよぎり、快諾した。母国語ではない言葉で研究発表をおこない、質疑応答をこなすことは実に大変なことである。しかし、その困難に向き合い、奮闘した5名の発表者の勇姿が、筆者自身の背中を押してくれた。5名の若き研究者たちの今後一層の活躍を心より祈念している。

こばやし・なおこ  
愛知学院大学文学部講師